



雲上叔話

伊地知文庫
文庫20
331



雪上夜話

完

伊地知氏書冊

和歌之物語集



一 芝山大夫の重考にひき、兵部大夫と申す、時行らぬる
 高野の歌集の和歌の歌集を新拾遺集の後の歌集
 のうへに、新拾遺集の歌集と目録ありて、おもむき
 新に世のうへに、新拾遺集の歌集と目録ありて、おもむき
 今、勅撰の集を作らば、申ありて、是を後入、其後、和歌
 集の時代を今、代と撰むと、言ふ、新拾遺集の歌集の
 後、代と撰むと、言ふ、新拾遺集の歌集の
 後、代と撰むと、言ふ、新拾遺集の歌集の
 後、代と撰むと、言ふ、新拾遺集の歌集の

一 是れは、南史の程母と稱したる程、懐人の名に、
の程につく、とあるに、今も家計に、
あり、ある、
仲らり

一 三折の程母、
わ、折也、
後の法、
ま、
なり、
一 芝山、
と、

わ、
を、
今、
なり、
な、
の、
指、
一 乱、
と、

寄世祝

重季に、
重季に、

法不學して後来き詞のよし作らざりしと申すにありし
おのゝかりし

一 國大細云基香の作らざりし懐民説の事下への括りね
おのゝかりし云々の懐民志も括りたり或ある事より
賀の懐民志を括りしとて人々を以て括りしと
おのゝかりしとて括りしとて

一 國大細云基香の 雲元説法皇は法皇一あり唯存
古寺清しといひ題を三のよきと仰りしと

おのゝかりしとて括りしとて法皇ありしとて古寺
法皇仰ありしとて古寺ありしとて古寺ありしとて
おのゝかりしとて括りしとて

おのゝかりしとて括りしとて法皇ありしとて古寺
法皇仰ありしとて古寺ありしとて古寺ありしとて
おのゝかりしとて括りしとて

を實證すち似合さるる旨のしおるありし法を他はす是実證の
ハ道途後と見ゆふふありはこれ見て見しけりち實證
物たる後也と見るに光榮難くお定てはこくけ
しとの約まるるを――
そのまのけころりめあり
よはけりちめなるをひくけしは後明し――光榮なるを
見るに如ありと仰す――

一 冷泉大納言為久ハ 亦つゞしと云歎きて
秋のころちとと美のふしにのころにあふ亦枝の自れに
このころち冷泉殿より後とよふまゝの神と度とつあ
かりにこけめを――

一 西三条實教ハ一代の勇歌といふ
よいめよふみちらんきさきの月入ぬる後にはれつやが

是を娘の娘のつ文字を宵のころちといふと説きいふを
後水尾院は是を宵の百ちといふと――あきこなり

古今集より

昔つそへ入ぬる夜のはなをみちやんこころちといふと
こころちこころちといふはいふこころち
一 聖元院法皇はより御つと――
よまて集ちを御集とせり御あらし――
は話なるのあつた御集あるあをよまらなるものま説きたり
一 一はとらるるを御といふとそよつるる集に

よまらなるのあつた御集あるあをよまらなるものま説きたり
よまらなるのあつた御集あるあをよまらなるものま説きたり
よまらなるのあつた御集あるあをよまらなるものま説きたり

秋の雲を片方の栞にまゝのさ 結ぶ契を枕をうらやみ
云々(秋の雲を片方の栞にまゝのさ)から作りしん能く入るまゝのさ
御をせしと云はば秋の季れは事なり秋雲ハ秋の天石なり
の付ひのさや(秋の季れは事なり)秋雲ハ秋の天石なり
栞の栞に片方の栞をまゝのさ 結ぶ契をうらやみ
この栞と云はば秋の季れは事なり秋雲ハ秋の天石なり
詞を御きく(秋の季れは事なり)秋雲ハ秋の天石なり
結ぶ契をうらやみ(秋の季れは事なり)秋雲ハ秋の天石なり

久々あきのとききまのたき川にまゝのさ 栞のあらし
あきけ秋をまのさ(秋の季れは事なり)秋雲ハ秋の天石なり
の栞のあらし(秋の季れは事なり)秋雲ハ秋の天石なり
何とも契をうらやみ(秋の季れは事なり)秋雲ハ秋の天石なり

二 及と法皇作(栞にまゝのさ) 栞のあらし

一 基香師の作(栞にまゝのさ) 栞のあらし

梅花 春風 栞雲 菊花 栞雲ありの字を入るまゝ
又上の句文字をまゝのさ(栞にまゝのさ)から作りしん能く入るまゝのさ
あし(栞にまゝのさ)から作りしん能く入るまゝのさ
水田氏者(栞にまゝのさ)から作りしん能く入るまゝのさ

上下の句をまゝのさ
栞にまゝのさ(秋の季れは事なり)秋雲ハ秋の天石なり
の付ひのさや(秋の季れは事なり)秋雲ハ秋の天石なり

一 雲元院法皇の家傳ありき年の新河らへ 新河懐と云題を
かきあひたり

本の家傳ありき年を我々のこの末の新河
廿年正月の事ありき年正月に法皇御願の事ありき年
と云ふ事ありき年 法皇御願の事ありき年
法皇の下之屋をあらはす事ありき年

と云ふ事ありき年の下之屋ありき年 神は後なる事あり
しりたりと云ふ事ありき年 神は後なる事ありき年
法皇御願の事ありき年 法皇御願の事ありき年

法皇御願の事ありき年 法皇御願の事ありき年
法皇御願の事ありき年 法皇御願の事ありき年
法皇御願の事ありき年 法皇御願の事ありき年

下之屋ありき年の事ありき年 法皇御願の事ありき年
法皇御願の事ありき年 法皇御願の事ありき年
法皇御願の事ありき年 法皇御願の事ありき年
法皇御願の事ありき年 法皇御願の事ありき年
法皇御願の事ありき年 法皇御願の事ありき年

一 廣豊に作らむと云ふ事ありき年 法皇御願の事ありき年
法皇御願の事ありき年 法皇御願の事ありき年
法皇御願の事ありき年 法皇御願の事ありき年
法皇御願の事ありき年 法皇御願の事ありき年
法皇御願の事ありき年 法皇御願の事ありき年

ちりけ事不空陰の面ぬりて及いぬたをりて其の重
きなりきし其れを捕りて其のこちにおりきしにおいせしこち
振と云ひて

海山の海ありて河をくす 海山振と云ふ所の也
其のこちのちんきさくをせん

と読めひらるるを元茶には見しと見し其の重なりて其の重なりて
云敷りて今ふちなりとて色や、其のとてしひて其の重なりて
とくとてしひて其の重なりとて色や、其のとてしひて其の重なりて
其の重なりて其の重なり

一 東山院のほけはありて其れを捕りて其の重なりて

中流道ありて其れを捕りて其の重なりて

一 ありてとて色や、其のとてしひて其の重なりて

けしるまゝとて色や、其のとてしひて其の重なりて

の重なりて其れを捕りて其の重なりて
其の重なりて其の重なり
其の重なりて其の重なり
其の重なりて其の重なり

我れに... ありてとて色や、其のとてしひて其の重なりて
けしるまゝとて色や、其のとてしひて其の重なりて
其の重なりて其の重なり
其の重なりて其の重なり
其の重なりて其の重なり

一 廣き江のお徳は村るとして其れを捕りて其の重なりて
降るなりて其れを捕りて其の重なりて

あるてし不二の言と流るの跡も夢じてはめを自覚は清らかな
とて興つはおのりし由重親のこの中をなしてははれらるる
今もよ持よちのちのちにて申さるるる二の文の能くしひ
多りやしと云ふ事よはつえはゆりぬ

- 一 基香御仲言し一懐はよき心の字をいりて直なる明ぬ
ものなり行年のもろなりし一しの懐は直なるなりし
たしここととあつさりんかして佛をまねて懐は直なる宗匠
まて程くくおつたやりの懐は直なるかゝるの言あり
上悼の懐はより外なきまかしたりのものもあつたりし
下冷の宗匠辰の四七年の言はる種のおもふ人ほり
りあはりのおふ言のたまふまゝあることいづらひなりし
あつたりしこといふ言はけらの言をいひてはるるなりし

あつたりしこといひてはるるなりし

けしこのおもひの心をいひてはるる人の情のあつたりし
いなるおもひの心をいひてはるるなりし
つら後光香経長の時あつたり

- 一 風早實経に一天持の言を親しくしておもひの心を
言ふ事よはつた言とていひてはるるなりし
なれはるる言をいひてはるるなりし
よ題のこの言をいひてはるるなりし
指しめよはつた言をいひてはるるなりし
はの言をいひてはるるなりし
つら言をいひてはるるなりし
つら言をいひてはるるなりし

よのゝのちかきいよしむのちかきいよしむ
はちかきいよしむのちかきいよしむ
いよしむのちかきいよしむのちかきいよしむ
いよしむのちかきいよしむのちかきいよしむ
いよしむのちかきいよしむのちかきいよしむ
いよしむのちかきいよしむのちかきいよしむ

新古今言付抄

西行法師

さういふ言付のちかきいよしむのちかきいよしむ
さういふ言付のちかきいよしむのちかきいよしむ

可しむ

わろまた言付のちかきいよしむのちかきいよしむ
いよしむのちかきいよしむのちかきいよしむ
いよしむのちかきいよしむのちかきいよしむ
いよしむのちかきいよしむのちかきいよしむ

おのめいよしむのちかきいよしむ

いよしむのちかきいよしむのちかきいよしむ
いよしむのちかきいよしむのちかきいよしむ

いよしむのちかきいよしむ

いよしむのちかきいよしむのちかきいよしむ
いよしむのちかきいよしむのちかきいよしむ

いよしむのちかきいよしむ

いよしむのちかきいよしむのちかきいよしむ
いよしむのちかきいよしむのちかきいよしむ

いよしむのちかきいよしむ

いよしむのちかきいよしむのちかきいよしむ
いよしむのちかきいよしむのちかきいよしむ

宗道家より侍交する事の外のことらむ——身はさるあめ
あやむ神子のやあきつりけり流るまじき金ぎし二五百首に
そとにけりあめりある侍交にむねより流るるにむね
より市交する事。まじりにけり侍交と見らるるにけり侍交
えとお侍交する事。まじりにけり侍交と見らるるにけり侍交

侍交と見らるる

實の侍交

けり侍交のこころにけり侍交のこころにけり侍交のこころに
けり侍交のこころにけり侍交のこころにけり侍交のこころに

一石山殿師香の御事。まじりにけり侍交のこころにけり侍交のこころに
けり侍交のこころにけり侍交のこころにけり侍交のこころに
まじりにけり侍交のこころにけり侍交のこころにけり侍交のこころに
まじりにけり侍交のこころにけり侍交のこころにけり侍交のこころに

けり侍交のこころにけり侍交のこころにけり侍交のこころに

けり侍交のこころにけり侍交のこころにけり侍交のこころに

けり侍交のこころにけり侍交のこころにけり侍交のこころに
けり侍交のこころにけり侍交のこころにけり侍交のこころに

左の侍交

けり侍交のこころにけり侍交のこころにけり侍交のこころに
けり侍交のこころにけり侍交のこころにけり侍交のこころに

一石山殿師香の御事。まじりにけり侍交のこころにけり侍交のこころに
けり侍交のこころにけり侍交のこころにけり侍交のこころに
まじりにけり侍交のこころにけり侍交のこころにけり侍交のこころに
まじりにけり侍交のこころにけり侍交のこころにけり侍交のこころに

成なりき後、かゝるの由、色、制、故、并、白、鹿、下、宗、久、石、
山、師、香、乃、後、経、あり、と、ある、に、梅、ら、一、と、ある、は、可、も、
む、え、う、め、し、け、あ、後、名、を、し、一、と、した、

古、今、集、并、信、お、り、な、し、と、な、り、

ある、う、め、に、な、り、あ、う、う、と、又、う、め、の、中、に、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、
そ、の、う、め、の、後、名、の、後、う、め、の、中、に、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、
梅、の、字、を、め、と、計、持、せ、り、め、の、よ、字、を、梅、の、字、を、あ、り、
う、め、の、う、め、の、う、め、の、う、め、と、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、
一、年、持、故、并、白、鹿、下、の、法、説、 宗、久、石

は、歴、明、石、梅、之、後、う、け、て、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、
又、後、せ、ん、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、

け、う、の、う、め、の、後、に、梅、を、し、て、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、
梅、を、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、
一、年、持、故、并、白、鹿、下、の、法、説、 宗、久、石

一、年、持、故、并、白、鹿、下、の、法、説、 宗、久、石
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、

一、年、持、故、并、白、鹿、下、の、法、説、 宗、久、石
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、

一、年、持、故、并、白、鹿、下、の、法、説、 宗、久、石
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、

一 後水尾院は前より寛政のころ分けてなれし御
まゝに種船と云々ありしころありし後せめて御
ほ感字群ありし

今ここにこの母とておそろしは女のころありしを
付一書りまゝおたに医方請寄し御所の御
まゝりて御と許さしきまゝりし御年とてひび
語るる御ありし御ありし

一 冷泉為久の御書と云々ありし

御の御書とてまゝの御ありしに御に本枝の御
御ありし御書とて以後本枝の御ありし御
御えん御は御書御ありし御ありし御ありし
御ありし御ありし御ありし御ありし御ありし

一 御書とてまゝの御ありしに御に本枝の御

一 中法門院の御書とてまゝの御ありしに御に本枝の御

鳥居光宗の

御書の御書とてまゝの御ありしに御に本枝の御
御ありし御ありし御ありし御ありし御ありし
御ありし御ありし御ありし御ありし御ありし
御ありし御ありし御ありし御ありし御ありし

一 御書とてまゝの御ありしに御に本枝の御

のハ正風紙めん紙のの紙と紙紙なる事くわんや
まをんはるた芝の草をんいまの鳥を捕ま
凡早飯の紙めん紙の紙をんいまの鳥を捕ま
ま紙紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙
し芝の紙

おきこれとらひちほくし紙紙の紙めん紙の紙めん紙
く紙紙の紙紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙
この紙の紙と紙し紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙
紙紙紙の紙紙

いふふまんとまの紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙
あ紙の紙紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙
まの紙の紙紙の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙

名も紙紙と基本の紙めん紙の紙めん紙

一紙紙大紙紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙
まの紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙
紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙
まの紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙
の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙
まの紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙
紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙

一紙紙紙紙の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙
まの紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙

まの紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙
紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙の紙めん紙

柳を包てうき〜夜掛えり走とほり玉木と云玉木視の
字のふし許のほ視をいわけいこえらりのなり別〜
毛鏡のちるるを〜後重み神にま〜備つ物と
ま〜申〜こお〜い〜云鏡みつけ玉とつける樹の
云鏡のふよま〜凡〜中鏡面〜務公中〜信信
ぬくほ物治ありし〜と〜皆作り〜お〜玉乃本〜
和歌の之の習い〜と〜なり〜お〜玉乃本〜
ゆわらほ物と〜と〜今〜ゆ〜沖〜神を〜祝い〜
ま〜後〜と〜と〜お〜〜〜〜〜〜
玉木と〜云あり〜是ら伊特冊の沖〜美と〜
紀州の能〜神〜と〜は〜えを〜掛〜神と〜ま〜
を〜村〜つ〜け〜持〜持〜〜高〜之〜子〜細〜と〜後〜木〜と〜

ほ視を〜と〜えら〜料とあり〜と〜と〜玉木と〜云〜
玉木と〜云〜由〜能〜照〜た〜因〜の〜能〜と〜云〜あ〜に〜載〜ら〜と〜と〜
〜と〜小〜通〜筋〜の〜の〜の〜説〜ゆ〜〜信〜せ〜れ〜結〜り〜ぬ〜

一 雲山首をきけ 玉地風と云題あり

風謡よ〜と〜木散り〜根を〜お〜り〜と〜
け〜と〜ま〜極〜の〜能〜奇〜ら〜ぬ〜と〜ち〜ら〜ら〜き〜と〜
ゆはらり〜と〜下〜の〜奇〜め〜ら〜福〜を〜〜け〜根〜を〜ら〜り〜と〜
〜と〜ま〜き〜と〜つ〜ま〜と〜と〜と〜の〜と〜ち〜奇〜信〜人〜の〜わ〜と〜
事なり

一 奇丹黒木赤木と鏡とと有鏡あり抄るるとととととと
新〜し〜き〜と〜切〜れ〜と〜赤木と〜と〜鏡〜と〜皮〜と〜有〜る〜と〜赤木
〜と〜い〜い〜皮〜竹〜の〜ま〜ら〜る〜と〜黒木と〜と〜奇〜鏡〜を〜み〜ら〜る〜と〜

と云はぬめいりまのこゝにて昔年より吳屋の住り
系族の侍子なることありしはまなりき後持ま付身
の部の前まる子 かの侍もあはるる事ありぬの住子
事なりしと云ふまの住りの事なり

一 六帖 卯 卯のあまの住を集る住丁帖と云ふ事ありしことあり

卯のおの住りとははるたさの卯のおまえなり
いふこと 天子配膳乃女官唯は後で降るありし
ことありしは後をさるるされどしはるるるる
すべしなりしはしはるるるるるるるるるるるる
は膳なりしはるるるるるるるるるるるるるるる
女官なりしはるるるるるるるるるるるるるるる
ことありしはるるるるるるるるるるるるるるる

掬自よりあの一のてはるるるるるるるるるる
きとまりしはるるるるるるるるるるるるるる
この膳に上りしはるるるるるるるるるるるる
其の膳に上りしはるるるるるるるるるるるる
水と云ふなりしはるるるるるるるるるるるる
典くたま娘の住りしはるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

あまの住りのことありしはるるるるるるるる
なると云ふ大花首のこゝをさるるるるるるる
身を語るとありしはるるるるるるるるるるる

あて一人の縁事と毎川是の傳(あ)と前皇より南なる
ほお傳ありてあてあてりつあて一人の縁事と毎川是の傳(あ)
りしはほお傳となくことなれより南今くほお傳となく
なり守馬門使の武者少路實隆は右左衛門尉の傳と
る事と定りてあてあてりつあて一人の縁事と毎川是の傳(あ)
の白まふあてあてりつあて一人の縁事と毎川是の傳(あ)
てあてあてりつあて一人の縁事と毎川是の傳(あ)
あてあてりつあて一人の縁事と毎川是の傳(あ)
傳(あ)となくことなれより南今くほお傳となく
の具書ありてあてあてりつあて一人の縁事と毎川是の傳(あ)
事(あ)となくことなれより南今くほお傳となく
十二子の傳 教の傳 四子の傳 伝の傳 伝の傳 伝の傳

八条の傳となくことなれより南今くほお傳となく
らあてあてりつあて一人の縁事と毎川是の傳(あ)
ことなれより南今くほお傳となく
あてあてりつあて一人の縁事と毎川是の傳(あ)
右左衛門尉の傳となくことなれより南今くほお傳となく
あてあてりつあて一人の縁事と毎川是の傳(あ)
あてあてりつあて一人の縁事と毎川是の傳(あ)

一 閑寂有聲 春日為群 為戸物師
あてあてりつあて一人の縁事と毎川是の傳(あ)
あてあてりつあて一人の縁事と毎川是の傳(あ)
あてあてりつあて一人の縁事と毎川是の傳(あ)
あてあてりつあて一人の縁事と毎川是の傳(あ)
あてあてりつあて一人の縁事と毎川是の傳(あ)
あてあてりつあて一人の縁事と毎川是の傳(あ)

鶴鳥をいまいつの鳥をとて物海をたづねる
 ままあけありはも鳥をいふと東あつては鳥はう
 身もあつたは季もあつたは外は一様はあつた鳥の名
 なくはくはつたは鳥の名はあけありはうはは
 百子鳥と後には大さ妻の季ありてあはうはは
 三子鳥とつり鳥ありはうははうははうはは
 ありははうははうははうははうははうはは
 ありははうははうははうははうははうはは
 とお名をいふはうははうははうははうはは
 とおとつてはうははうははうははうはは
 うははうははうははうははうははうはは
 へんる三子鳥三本十二子の後うははうはは

今集を讀むは古今侍文の古よめてはうはは
 ありははうははうははうははうははうはは

鳥鳥うはは

鶴のうはは

まきとをいふはうははうははうははうはは

うははうははうははうははうはは

つらまの鳥ありはうははうははうははうはは

まゆわのうははうははうはは

名はくははうははうははうははうははうはは

うははうははうははうははうはは

あつたはうははうははうははうははうはは

鳥師はうははうはは

鳥に

哥の音と成るに似たりぬをきくは後と云ふ
ふ字解りの音も色々ては和者なり行ふ
一 哥の音と成るに似たりぬをきくは後と云ふ
ありたるはは風と云ふの音もあはれに
なると云ふはちうなるにはちやん
漢や漢と云ふは字の解りては漢文の
なるに云ふは字の解りては漢文の
はけおのりぬをきくは後と云ふ
師なるに云ふは字の解りては漢文の
あはれに云ふは字の解りては漢文の
おのりぬをきくは後と云ふ

一 一なるに云ふは字の解りては漢文の
おのりぬをきくは後と云ふ
あはれに云ふは字の解りては漢文の
なるに云ふは字の解りては漢文の
はけおのりぬをきくは後と云ふ

一 一なるに云ふは字の解りては漢文の
おのりぬをきくは後と云ふ
あはれに云ふは字の解りては漢文の
なるに云ふは字の解りては漢文の
はけおのりぬをきくは後と云ふ
あはれに云ふは字の解りては漢文の
なるに云ふは字の解りては漢文の
はけおのりぬをきくは後と云ふ

つゝとるゝとてふまをわしはしきひよの二侯文をてんけい
秋の日の新種のを尾めとあそぶる我志の心を
隣と云ふ存るりあけきつてわらぬる世をよめて陸行
ハ漢文の通るげきしきりてわらぬる世をよめて
つゝとるゝとてふまをわしはしきひよの二侯文をてんけい
日本の書をしていふるは是れはわらぬる世をよめて
の三章あり御書につとていふるは是れはわらぬる世をよめて
ゆりてふる世をよめていふるは是れはわらぬる世をよめて
いふる世をよめていふるは是れはわらぬる世をよめて
実証の侍ありおのむき人平小御守侍つゝ
おみつきたにあらん

一 ちがひつゝ ちがひつゝ ちがひつゝ ちがひつゝ

つらさしゝ 難あつゝ 難とふ初なるつ

いそがしきし ちがひつゝ ちがひつゝ

にはゆきあり ちがひつゝ ちがひつゝ

いそがしきし

一 堀川院百首

秋をせうかりあひるあそびを新編のまあを
そとをうらつゝとて武者少佐実証のつとていふる
ちがひつゝ ちがひつゝ ちがひつゝ
ちがひつゝ ちがひつゝ ちがひつゝ
ちがひつゝ ちがひつゝ ちがひつゝ
ちがひつゝ ちがひつゝ ちがひつゝ

此の巻
堀川院百首
ちがひつゝ
ちがひつゝ
ちがひつゝ

見なすにたむらひもあやうきつゝのころぬるに候
 ちあふつゝの程

新後拾遺集

日蓮宗屋上の様ねまひ結ぶぬ程に書きたりし
 けつららうと云詞も毎よくに御尋のめはのめしひ
 愛みありしつゝのめりも又はのちのち様
 敷ひひもまうちらちの敷とてめらうと云信理光の
 字のたむらひと云舟のちらひの字とてまふもの字
 可しつゝとてめりしもの程に書きたりし
 まゝのころ後めつゝ後後撰集 後撰味成の法書
 後のころなる程の板底あゝめりしと云と云
 そのころと詞のよみ程あると云後撰集のころ

のめりもあやうきつゝの程に書きたりし
 ちあふつゝの程

續古今集

其月の夜ある程の夜もあやうきつゝ
 ちあふつゝの程

仗見院法華

梅花さけもあやうきつゝの程に書きたりし
 ちあふつゝの程

一 かなたにきふつしふんそと玉極の侍もさる侍り
是やけちし御てこねさるあまもさる御て年改のせも
後深のま川あてふまふしあうあまもさる御て歎さるま
まあこ定家なる人一言ハ時の風を改えておきていとい
真しそふまもさるつはいとさうち旅おこ定家なる人
奇の跡まのうく歌さるめこころあねおるにもあつ
とまもさる奇の跡な風をて南をまあをたにそい書
ましん

一 續古今集

つねぬのせもままの跡さるけしん
いとにまもさるつはいとさうち旅おこ定家なる人
こころあねおるにもあつとまもさる奇の跡な風をて南をまあをたにそい書

後明一しわあらかぬあうて侍り
ましあうち奇の跡さるけしん
は改島跡さるけしん

つ奇に二集み出で奇は難家
おの跡もえちのおらにまうりさる人

おまのえちのらみけしん
まもさるしん
のまもさるしん
袋末侍れし侍り
まもさるしん
まもさるしん

この書は後のものゝ向の記の類包の結ぶべきもの
ありしやししをあるものなり

一 和歌の會はわかれし久長に事そむ和歌の向あり
ありしものなればすむと裁すもの事さかたるる
るまのちりたる記をしししきまはしす久長を
と備せしもの今見えしものなれば久長の出を
よめしものししなる 夫の押すは捕るもの
候なりとさしししと斜にふりししと久長の事なり
斜にふりしもの事と裁すものあり久長の事なり
夫の事物は原にありしと久長の事なり
國の古事と久長を裁すものありししは久長
候なりとさしししに久長の事なりししと久長の事

の枝を折ししと久長の事なりししと久長の事なり
はらしと久長の事なりししと久長の事なり
はらしと久長の事なりししと久長の事なり
和歌の事なりしと久長の事なりししと久長の事なり
の事なりしと久長の事なりししと久長の事なり
考りしと久長の事なりししと久長の事なり
かりしと久長の事なりししと久長の事なり
の部敷しと久長の事なりししと久長の事なり
和歌の事なりしと久長の事なりししと久長の事なり
た久長と久長の事なりししと久長の事なり
と久長の事なりしと久長の事なりししと久長の事なり
と久長の事なりしと久長の事なりししと久長の事なり

さへき中身の可しなき懐れ程人なるも人のまじ
 しい路のくのいよとと三葉西の公懐れこの園の古四言
 ほおれありしと痛程とあるは外へあしむ
 地下をく侍りて例のこくあつたひて目立ぬ
 多なりし書さるの御まぬしとのほゆゆ

一 近樹有あふれし其可しはふまの香とさゆの時
 赤くわ

さる懐れなるも人なるも人なるも人なるも
 招平隆因つとる

一 ことり鳥の白ひなるも人なるも人なるも
 彼か木とあつくさくさくさくさくさくさくさくさく
 是れ母のソ子なるも人なるも人なるも人なるも

さる懐れなるも人なるも人なるも人なるも
 招平隆因つとる

とあるさるのほちのひり

一 懐れとあふれはち昔をなかりし情和天白とさる
 秋れとあふれはち昔をなかりし情和天白とさる
 の記みえつとるとり鳥の白ひなるも人なるも
 前後の人の情和天白とさるはち昔をなかりし
 夕つたあふれはち昔をなかりし情和天白とさる
 情和天白とさるはち昔をなかりし情和天白とさる
 鳥色ひとさるはち昔をなかりし情和天白とさる
 彩夜をさるはち昔をなかりし情和天白とさる
 將軍家光とあふれはち昔をなかりし情和天白とさる
 ありし

あまのくにたまきまの日のせりくはなむかひのしり新かきかふ
信水屋現の歌子傳きさせたりとせりかたにやうらぬと
後せかふ天あみ取つさる胡あやと石山師香々のこのあや
一 聖の歌を讀まはるくさしとせり法や一 面きうく
後んとしとせり法を讀く後をれとあまのあはれと
実陰わりのあやりのより一 橋本実松に傳きしとせり
うりて能くの讀多むる聖の歌とせりにせりとせり
とせりとせり

歌ハ汎のこのあまのあまをふとあやとせりとせり
あまのあまをふとあやとせり 乃のあやとせり
あまのあまをふとあやとせり 乃のあやとせり
あまのあまをふとあやとせり 乃のあやとせり
あまのあまをふとあやとせり 乃のあやとせり

王のあまのあまをふとあやとせり 乃のあやとせり
のあまのあまをふとあやとせり 乃のあやとせり
一 乃のあまのあまをふとあやとせり 乃のあやとせり
をよあまのあまをふとあやとせり 乃のあやとせり
批ハ章のあまのあまをふとあやとせり 乃のあやとせり
あまのあまをふとあやとせり 乃のあやとせり
あまのあまをふとあやとせり 乃のあやとせり
あまのあまをふとあやとせり 乃のあやとせり
あまのあまをふとあやとせり 乃のあやとせり
あまのあまをふとあやとせり 乃のあやとせり

明和九辰年西夏三

富田行之在表

尾

嘉永乙酉夏寫

